

が民族の大破局が導かれぬためには、 むすびついている勞働者・農民への彈壓がいかなる特質をもつものであるか、諸對立の尖銳化しつつあるうちに、わ 把握することが必要であつた。けだし、それによつて當時急速にはじめられていた帝國主義戰爭の準備が、 ずく欽定憲法(國體護持)が鼓吹されていた。そのとき歴史科學に從事する者にとつては、 な基本方向、歴史を前進させる推進的な主體を科學的に究明することが必要であり、また、その任務でもあつた。 しい對立狀態の尖銳化から、民主勢力、その思想、 とりわけ、 中日戰爭(ひいて太平洋戰爭)のはじまる前の日本は、民主勢力と絕對主義を土臺とするファシスト的勢力との激 日本資本主義の特質にもとずく基本的矛盾から、支配する階級によつて押しすすめられるにいたつたか。 わが民族の民主化を阻止して、その前進する歴史の齒車を逆に押そうとする舊國家體制の構造的本體 いかなる鬪爭が必要であるか、を決定することができるからである。 その科學的研究にたいして彈壓が行われ、 歴史のすすみゆく客觀的 神權主義、 いかに それ にもと ーその

が

必要であり、

そのためには、

つ具體的に分析

ためには、幕末・明治以後における一切の基本的矛盾、それを總機構的に構成せる舊國家體制の客觀的諸條件を本質

・究明するとともに、そのうえに生成し發展しつつある力關係の變化を詳細に分析すること 日本資本主義の全機構の分析、その全史的な特質矛盾の解剖を必要とした。

つあるなかで計畫され、滿洲事變中にその第一卷が發刊され、五・一五事件の號外の鈴の音をききながら編輯した日 資本主義的世界體制のもつとも弱い一環をなしていた日本帝國主義が、世界恐慌(一九三0年)によつて震憾されつ

--

紙幅の關係上、充分に分析し展開していない個々のテーマについての研究論文を諸雜誌に公けにした。本書以下に收 とめて「日本資本主義社會の機構」(昭和九年、 本資本主義發達史講座七卷(野呂榮太郎氏を主たる編輯者とせる)を發刊してから、わたくしはそのなかの三篇をま る論文集は、 これらを收錄したものである。 一九三四年)を上梓したが、それとならんで、そのなかでは觸れながら、

•

總括されている天皇制をピラミッドとする舊國家機構とそれに拮抗するブルジョア民主主義革命勢力とであつた。 n われが、 まずなによりも眞正面に、 取りあげねばならなかつたのは、 日本資本主義の基本的矛盾が全機構的

歴史科學による分析において、われわれのえた結論はこうである。

絕對主義の成立およびその特質的發展が、第一のテーマであつた。

封建的生産様式を資本制生産様式へ轉化する過程を溫室的に助長し、この轉化過程を容易にし、その推移を早め、

的原則である(本書第一編第二章)。 この過程を短縮するために、 社會の集中的および組織的强力が絕對王政を成立せしめることは、 諸國の共通した歴史

ح の絕對主義は、資本の本源的蓄積の槓杆たる力として、農民大衆・都市の勤勞者階級にたいする經濟外的强制の

機關として作用しつつ、 が、 1 この體制の根本的性格である。 および勤勞農民が、 この絕對主義が外見上超階級的にみえればみえるほど、 無制約の權力を行使するばかりでなく、 桎梏となつたこの體制をとりのぞこうとする運動にたいしては、 そしてこの絶對主義の固有の物質的階級的基礎ならびにその社會的 資本主義の發展とともに生み出され また事實上相對的な獨目性をもつから一層その根 これを徹底的 たプ 基礎を分析す K 彈壓するの H V タリア

據を探求することが必要であつた(本書第一編第二章)。

小工 内的矛盾を解決することなくして、 創出にむけてのみ發展しゆく矛盾。 育助長せねばならぬことに制約せられるその矛盾、 て狹隘であることに當面する矛盾。 運)動を排外主義、 ョア民主主義革命の要求とその運動の熾烈なことのために、 獨占的傾向をとつて急速に發展しながら、半封建的搾取にもとずく勤勞大衆の貧困のゆえに、 業的小生産・流通場面における小商人の厖大な多數を殘存せしめるとともに、 かるに、 まず第一に、 日本の絕對主義は、 半隷農制を維持しながら、 軍國主義的國權主義へ導く政策がとられた。これが明治期以後の國粹主義の本質であつた 日本資本主義の基本的矛盾の全機構的な政治表現であつた。 したがつて第二に、資本主義が、 そのことは、 しかも資本主義が發展するためには國內市場の狹隘を植民地 しかもその土臺のうえにまたその再生産のうえにのみ、 同時に都市・農村における勤勞大衆が半封建制を清掃せんとするブ 同様に資本主義の構造が、 それを鎭壓せんとする力の對立 脆弱・畸型的な不具なために、 その基本的な不均衡として、一方では 他方では、 資本主義が巨大財閥の 國内の基本的矛盾すな へ、そして、 國內 かえつて早熟的 資本主義を保 市場がきわめ か 自由民 かる國

第四編第十三章)。

四

化、ひいて帝國主義戰爭に全國民を騙り立てていたのである。わたくしどもは、この舊國家體制の本質とブルジョ のブルジョア民主主義運動が昂揚すればするほど、ますますこれを抑壓し、 かくして、 天皇制をピラミッドとする舊國家體制が、 以上の國內矛盾を國內的に解決することなく、ますます人民 かえつて中國・滿洲・朝鮮などの植民

民主主義革命の必然性とを、 したがつて、 戦争による民族の大破局を防止するためには、 科學的に、すなわち歴史科學的に闡明すると、そういう結論をえた。 ブルジョア民主主義革命の徹底的な遂行が必要であり、

者・推進力は、 任務は急速に勞働者・農民、はたらく勤勞人民に移行していたから、このブルジョア民主主義革命の主體 全國家體制の民主化のみが戰爭を防止しうるものと考えた。しかし、日本では、このブルジョア民主主義革命の擔當 自由主義的有産市民ではなく(本書第四編第十一章)、自由主義と民主主義とは急速に分離し、 推進力 民主主義

擔當者はプロレタリアートを主力とする農民。あらゆる勤勞者の同盟である。

速な分離、 場面がひらかれ、 日本のブルジョア民主主義革命史を取扱うそのさい、 また勞働者階級はこのブルジョア民主主義革命によつて舊國家體制を清掃しつくしてこそ、公然と資本と鬪爭する とうした觀點から、またブルジョア民主主義革命史それ自身も再檢されるべきものなのである(本書第一編第一章)。 自由主義的有產者團の官僚への妥協、 それみずからの階級解放も容易にされ、 したがつて自由主義と民主主義との嚴密な區別、 わたくしは日本におけるかような自由主義と民主主義との急 この過程を通じて新しい社會經濟構成をつくり出してゆく。

勤勞階級のみが

している(ブルジョア民主主義運動史―「日本資本主義社會の機構」所收)。 日本民主主義革命の遂行者であること、および、 ブルジョア民主主義任務の急速なプロレタリアート この點はきわめて重要であるに か の移行 かわらず、 を强調

以後、あまりにも問題にされなさすぎる。

生産樣式への社會構成上の變革であるが、それには「上からの革命」も「下からの革命」もある。 る主體性をも含むものであるから、 ア民主主義革命は、下から全人民が絕對專制主義國家體制を根の元から清掃しつくして民主主義國家體制を樹立す さらに、 ブルジョア革命とブルジョア民主革命との區別である。 ブルジョア革命とブルジョア民主主義革命とはその意味するところにおいて根本 ブルジョア革命とは、 封建制生産様式から資本制 しかるに、 ブル

とき、幕末マニコは落鶯か、民鶯かによつて根本的に異る意味が附さるべきであるにかかわらず、 たとえば、 歴史の分析にあつても、 明治維新における市民のブルジョア民主主義革命意識、 運動を根本問題とする

的に區別されねばならぬ。

革命とブルジョア民主主義革命との意義の根本的區別も、 いては、 ブルジョ ア革命がブル ジョア民主主義革命にすりかえられる(本書第四編第十章第五節)。 こんにちにいたるまで、まだ充分には意識的に明かにされ これが混同されて との ブ ジョア

70

ていないようである。

資本家地主階級の ブ p ッ ク は、 **戰爭と絕對主義を土臺とするファシスト的專制主義とにより、** 危機からの活路を求

序

出口を勞働者および勤勞農民にたいする攻擊とともに、朝鮮・滿洲・中國への搾取の强化に求めた。かくして全中國 日本帝國主義は、 自己の對內的および對外的諸矛盾によつて袋小路に追いこまれていたが、 この袋小路

六

滿洲における舊地位の鞏固化と新地位の獲得化に、挑發的戰爭に準備をすすめてきた。 日本資本主義の構造そのものに由來する基本的矛盾、その支配體制の不可避的な冒險であつた。 中日戦争・太平洋戦争は

この認識は、 ひとり戰爭のはじまるまえにおける日本資本主義發達史講座の執筆者の考えばかりでなく、また當時

のソ聯日本研究者の見方(たとえば、マジャール昭和六年十一月、日本版インターナショナル十二月號)ばかりでもなく、アメ カにおいても戰時中戰爭後に刊行されたオーエン・ラティモア「アジアの解決」(一九四四年講演)、

ヤ 觀方が大體においてその軌を一にするものであつたし、 觀(たとえば楚儀「日本天皇制の基礎およびその特質」は野呂榮太郎の著を引用して)、その他世界の進步的知識人の 「アジアに おける新フロンティアス」(一九四五年)やエドガー・スノーやビッソンやさらに中國人の 諸國の日本研究も、 日本資本主義發達史講座によつて前進し フィリップ・ジ 對日戰爭

準備の眞實をつくことに恐れをいだいた結果、警察・憲兵の權力によつて、 かるに、 われわれの見解に反對する二つの潮流があつた。一は、われわれの研究の科學的成果が支配階級の戰爭

ていた事實も否定できない。

はブ 二・二六事件前後から、 ĵν ジ 一年六月「コ ア アカデミズムを含めて、それらの立場に立つて、真理の探求を抛つた。 Д 真理を求める多くの學徒がいかに無殘な方法で逮捕追求せられたであらうか。 ・ア カデミー事件」なる名を冠せられて檢擧された。 われわれの研究を壓伏することであつた。 しかも世の「學界」「思想界」なるもの ---ついに、わたくしも餘儀 わたくしなど

なく筆を折つた。

その二は、研究が不充分であり、眞實の實態を把握せんとする意力に乏しいためか、誤つた理論をたてた人々であ

る。 絕對專制主義が日本資本主義の基本的矛盾のゆえに成立し、そのためにながく存績してその危機の活路を戰爭に求 あるいは、それ以上の反動的意圖をもつたものもある。

いるのであるから、軍國主義は日本資本主義を他國と分つ特質ではない」とする岡田宗司氏(改造、一九三二年三月號) めんとしているそのとき、 があつたり、基本的矛盾の對極である農村半封建制を抹消せんがために、 るいは、軍國主義的特質が戰爭を開始せんとしつつあるときに「現在において諸列强はいずれも强大な軍備を有して 猪俣津南雄氏は絕對專制主義がすでに實質的にその基礎を失つたとし

「現代日本研究」 高利地代、 範疇としての地主のブルジョア

化を唱道したりする勞農派の諸君があつた。 多くの研究をなさざるをえなかつた(次卷に所收)。もしも猪俣・櫛田氏や雜誌「勞農」派の諸君の見解が正しかつた 制の基本的矛盾の對極であり、全勤勞大衆の民主化を妨げている基本的條件であるから、 ――農村における半封建制の殘存は日本獨占資本主義の、 わたくしも、 また舊國家體 これに關して

すべての諸論爭問題は、 歴史の進展自身が解決をつけた。事實そのものが學説の眞否を決した。 とするならば、

戦後の土地改革などは必要もないであろう。

れわれに課している。すなわち人民的民主革命の理論、 **げんざいにおいては、** 歴史は現下の國際的對立の なかにある日本資本主義の構造的危機に關する基本的研究を、 國家理論も前進せしめねばならず、農業理論も發展せしめね

七

序

ばならず、すべては現下の人民的民主革命の現實の進展に對應して劃期的に新しい科學的研究がなされねばならぬ。

いわんや舊くからの謬論をもくりかえし、反芻し低迷している論議が、なお、こんにちまで横行している。日本資本 そうであるにかかわらず、この新しい現實と人民民主主義革命の進行の事實、その理論の内容をみとめようとせず、

はり必要である。 主義のげんざいの構造的危機を究明するばあい、なお、こんにちにまで持ち越されている謬論を一掃することは、や 舊稿が、 これにたいする資料たりうるならば、今後の理論的展開に多少とも役立つであろう。論爭

における論點もあるから、 標題・文章全部そのままにて採録する。

本書の編纂については、 日本評論社、羽鳥卓也君の勞に負うところが多い。記して深謝する。

九

四 七 年九

月

者

著

目次

目

次

第一節

壹	商業=高利貸資本と地主との内面的組み合せと凶荒	五
薑	封建的構造體の法則と凶荒 封建的構造體の法則と凶荒	四
三	凶饉の諸狀況	=
	その結果たる「人取り」	
	社會的基本諸原因――年貢の重課その他の過役、「米取り」、「穀取り」、「金錢取り」――	=
Ξ	人力衰耗、淺耕、不充分の施肥	
==	節 天明、天保の饑饉	第二節
1110	封建制延命策としての物産獨占買入れ、奢侈と武道	=
Ξ	南部藩の租法と過役・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	_
\equiv	節 南部藩における農民	第一领
\equiv	はしがき	
	天明・天保における南部領內の飢饉 、 農民騒動	
\equiv	+ 封建主義の危機と凶作	第五章
104	節 不具的階級分化の原態	第四節
岦	節 封建農業の分壞。にも拘らず封建制によるその利用、依然たる封建體制の盤根	第三節
六	節 年貢の强徴および公權的な高利貸制との內面的組み合せ	第二節

目

次

三

40	科學的研究のための自由	第十章
	キャプテン・オブ・インダストリー	第九章
	安藤昌益の自然眞營道	第八章
	經濟倫理と職分思想	第七章
	ⅰ 餘論——東洋の商人道德における倫理的性格の缺如について	第五節
	゚ 産業家の企業精神におけるエトス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	第四節
	b 商業・金融業の生長に對する道德觀念	第三節
	☆ 職分倫理學體系における公正價格と徴利の禁止	第二節
	゚ ビジネスの倫理	第一節
	商人道德	第六章
	經濟倫理と科學的自由	第三編
	南部藩における天明以後の農民騒動	第三節
	崩壞過程にある封建領主に蝕み入る商業=高利貸資本	六品
	次	目

――その史的考察――

	绺								<i>\$</i> \$	第				
	第十二章	第七節	第六節	第五節	第四節	第三節	第二節	第一節	第十一章	第四編	第四節	第三節	第二節	第一節
その資料と檢討	秩父事件	自由民權と農民	日本ブルジョアジーの妥協的自由主義の根據・限界・自由民權運動の內部的基本對立 〒五	資本制大工業生産の前史における母胎内部の不具的矛盾····································	明治維新、ならびに、商業資本・高利貸資本・半封建的地主	藩閥政府のブルジョア側面への修正再編成	士族・豪商・豪農	日本資本主義と自由民權	自由民權	日本における自由民權と國粹主義	半封建的官僚政府の下における科學の自由、とくに、大 學 の 自 由	ブルジョア革命過程における、科學の自由のための活動	封建的支配體制に對する科學的研究のための活動 10元	科學のための活動の、歴史的・階級的性質
	- 1	$\overline{}$		$\overline{}$	_									_

目

次

自由民權運動に對立し、國權主義へ――

-爾後における國粹主義の發展の端緒…………

第一編 ブルジョア民主主義革命史

第一章 ブルジョア民主革命史の史的分析に

關する課題・樞要點

〜―その典據としての、エンゲルス「ドイッ農民戦

する一研究

は

L

が

き

は なしえないでいる。又、一國の特殊性のみに陷沒し、その世界史的規模における普遍的方法、比較による差異の確定的方法を無 者たちは、その無方法のゆえに、問題所在さえ辨えず、史料の蒐集を云爲するも、歴史の闡明に對して重要な資料の撰擇をすら ないし、無方法なれば、問題の提出の仕方自身さえも誤謬に陥り、史的過程の具體的・本質的・法則的究明のどときにいたつて 相關するところである。したがつて、課題についての明確な焦點がなければ、そもそも問題の所在さえ、把握することすらでき 到底、なしあたわない。研究方法の無方法こそ、ブルジョア史家、似而非マルクス的史家の本質的特徴であるが、それらの 問題の提出の仕方は、とりもなおさずその研究方法の表現であり、問題そのものの把握の仕方は、研究の課題と、まさに、

ブルジョア民主革命史の史的分析に關する課題・樞要點

 \equiv

然の

歸結で

研究に對して、 ところである。 する そのことは、 史家も同様である。 全く決定的に對立する課題・研究方法・問題の把握の仕方を示している。 「ドイツ農民戰爭」(一八五〇年)は、 封建制の崩壊過程、 これらの者たちが、 ブルジョア革命史に關する研究においても、またまさしく完全に、自己曝露をしている 史的過程の本質的 これらのブルジョア史家、 ・法則的分析をなしえないことは、 似而非 7 この著の問題提出の仕方・研究方法は ル クス主義史家の その無方法の 封建制崩壊過 當

视

編

ルジョア

民主主義革命史

るか? 舊ロシア型との比較と相俟つて、 制解體過程の具體的分析に對しても、 に關する差異と對照とを明確に確定せしめうるならば、 しめる標準的形態としてのドイツのそれを、 「ドイツ農民戰爭」は、 ことあたらしいかのようにみえるにかかわらず、新に繰り返して、 といえば、 德川の封建制崩壊過程・ブルジョア民主主義要求の發生する地盤の史的條件と對照・比較・差異の確定をせ ブルジョア民主主義革命史の史的分析に對して古典的典據をなすものである。 前進的に遂行しうるであろう。ここに、 また、一の基準的典據をなす著作である。 極めて精確に分析しているからである。 日本の封建制解體過程の具體的分析を、 同著の再研究の必要、 同著に對するM・E・L研究所の序文を基柢としつつ、 では、 兩者のブルジョア的發展=變革過程の成熟 いかなる意味において、 史的研究の意義獲得のために、 その世界史的地位の確定の上に、 それは、 典據たるのであ 徳川

る。

現下のこの種の歴史的諸問題研鑚に對しても、

最も重要な指針と無方法的ブルジョア史家に對する批判とを、

あたえるものであ

0 封

民の決定的解放のために、 ・一八七五年の第三版に跋を附し、一八八二年の著『社會主義、 最も有利な條件をつくることを史的全過程の方向として確定した。 空想より科學へ』の 卷末には、 一八七〇年の第二版に新しい序 ドイツ農民史を取扱つた「マ

本稿が草された所以である。

同著は、

一八四八―四九年革命の直後の一八五〇年に執筆せられ、

封建的支配の残痕を清掃することの

3

勞働者

八二年におけるゾルゲ宛の手紙、晩年の一八九三年におけるメーリング宛の手紙、一八九五年における死の直前のカウッキー 爾後「農民戰爭」の附錄に收められることになつたことは、一九三二年ロシア版でも同樣である。本文に引用するとおり、一八 ルク」を附し、原著者がいかに、第十九世紀後半全般を通じて、この問題の考究をつずけているかを示した。この「マルク」は、

とがあつたことを語つている。だが、資本論第二卷第三卷の出版準備の仕事が、この計畫の遂行をゆるさなかつた。

の手紙は、いずれも、エンゲルスが死ぬまで、この研究を撓まずつずけ、且つ、原著をヨリ完全に改訂しようとする努力と計畫

が、それらの詳細な校合を本稿は略する。 年にM・B研究所は「農民の十二ヶ餘要求」を附錄とした定本を刊行し、その際、リアザノフが序文を書いた。それには英譯本 schaft ausländischer Arbeiter 典據引用比照を註に附加した版を刊行した。右の序文は、 ○一九二六年)があわた。そして、一九三二年に、M・E・L研究所は、序文を附し、ヨリ詳細な考證・マルクス主義體系上の ーリングが編・序文を附した一九〇八年版。ヘルマン・デゥンケルの編・序・註を附した一九二五年版についで、一九二六 に據つたものである。 同書が、 サ同盟における外國勞働者のためのドイツ語本 (Verlagsgenossen-前の刊行にない註を附した點など詳しく紹介したいのである

第一節 基柢

していた評論誌たる「新ライン新聞」の兩號に登載せられたものである。 ンゲルス自身のしるすところによれば、本書は、一八五〇年の夏に執筆せられ、 同年はじめて、マルクスが編輯

早 ブルジョア民主革命史の史的分析に關する課題・樞要點